

壽進徳
上

特別
A5
6714
1



知永三夜

塔月丘次

<2017-8>

仙家五雲在_二五重軒_一云者何耶
群仙會集于此也主人交于市
其交于市者曷仙會也耶騎鶴
來耶御風至耶人為不敢知之
此其會集也而於喧于巷以為
松籟度空絃歌響于隣以為禽
語出林此仙客所以脫然也嗟
語宴酣各散於是主人拾其平

唾得之則皆青春之化也緝之
則五色花雲從手且重吁主人
所以軒之為名也然矣仙子楓
谷清余叙之晉子沒後余噤以
幾有年許否屢請不置仍容其
吻云

丙午四之日 午寂山人識



松香根面八句

贊梅畫

とこやは小細く梅を三枝壺
底を何方に造りて毛
籬を清鬢に挿て乃あり合々
菊のともり小牡丹の
物より秘夢古此自由あり
大鳥より下不見盤
難時乃名代取以
桐油ほとてし淨用石満

杏英 白雲 玉尋 百里 潭北 洛水 素丸 露月

菜の花

菜の花きつりの中とくは蝶を
 菜はむし僧の被戒の意味は
 ちよめくく人れ菜の花蝶は活
 碎し多きは菜の花はく小笠掛
 笠ありと水菜は青も咲く
 花きつりく小咲や菜の花男山
 蝶とぬれむしあや水くまき菜
 菜の花や身中央は日向方
 きの花や余ふ自たけは青き

山玉 治旭 暮琴 富雪 志水 柴荷 理鐘 吟糸 一觚

女

菜の花や又藤ありは花は
 きの花小くく日くまき
 菜はむしや挨拶物乃夕紀
 又つとくは海は菜の花は青物
 菜の花や道場分は九十九
 菜はむしや藤くけふ山は合所
 菜はむしや富や溝はくは
 きの花や木下門くは女席
 定思ふ菜の花の時を花は

一漁 和賤 昔花 藤枝 立儿 八木 潜之 楓谷 貫十

菜の花や序あるは百万の媚
 菜乃花れ雲やト野に帽を打
 菜れ花や皆野に猫乃うら色
 菜乃花や三此果たけし油粕
 菜花れ陰百程いせ菜花れ見
 菜れ花や或は海に始はる事
 菜乃花を下若く香は花絶
 菜れ花や君の身とは娘長
 菜れ花や翁を現し一もの十
 菜乃花や流花傳はる橋種

浪十 市嵐 艶女 佐野 國磨 日杜川 日里般 日蕪李 病蕪十 日蔽花 日晩舟 日勇松

菜の花八九条の鬼は毎花
 菜乃花や妻を見きてふきつる言

田舎

母れ人の馬把乃花や三輪花筋
 田乃花や若菜取取は縁はる人
 菜初やまじりては牛ふはと切て
 田乃花をも風俗かゝやせんご機
 田乃花や是下此花を酒物
 花乃花や禊と懸との花対
 田乃花や如月二百はさひ合

秀圃 露月 夙丈 柴荷 理鐘 志水 吟糸 一紙 藤枝

泊子秋乃東風小但幸時配
 細波以田西を流れるは
 田只月や牛小若きるを
 秋授之るを孔子を笑ひ秋
 田也一や先少は所を
 神代より味増ふ秋子田も
 神此田を鼻半は若く修習
 田秋也るは比を先とし
 垣根へ吹風を移るも小蝶那

蝶

昔花 秋雨 立几 蒹葭 大梅 杜野 露月 白雲 蒼玉

うきと秋乃細目小送る胡蝶哉
 抱蝶をかりふと定めのや結ひ
 追蝶も速先れま手う那
 着紙乃え結を射の小蝶哉
 へふくや花小舞子れ結ひ
 庄周とありるをありて

百里 如珪 女霞友 八木 市嵐 東竜 紫紋 如林 日薫格

序代草子や山ありも枯活れ今袋
 三石侍も糸之れも重き初外の日
 業は花や初外此所幸小幸幣
 世は活や弓ハ袋了了午房賣
 唐弓や弓了了歩拂ふ神此雲
 筆もし登ぐて目打や男や下
 白髪乃弓羽子賣や大護院
 名みわくく摘ぬ娘業やたき山
 茹蓮もやとく下向れ能く如
 男山折る七扱る七扱る

素九 雄玉 里仙 扇車 以翠 紫紋 可翁 艷女 露月 潜之



梅の香は包んで見ると丸呑羽
 花は先深きも今であらうは葉
 折残は心先や籠れ一尋
 毒小轄やるや花物かたし
 は梅は俳度曲より二交みけ
 紅色や梅の勇氣は深自通
 名を強しや又百名梅の花
 いふ程もその花志著し中は何
 意ふ八又葉所序了梅屋安
 跡くも枝を南へはさや氷

標梅 蒼玉
 折巾 蒼松
 木昌 野全
 東龍 芦反
 露月 潭北



蒼玉
 貞

待苦此枕をぬすの花の雨
 宗盛を花すよなきをを素子
 海山を杉木橋此回心一
 了きは越路敷入と方人の所案
 身と二の表奉公花す今
 かう那のは^暇西持ま^迷といふ業終
 ち〜光を我ちき〜とす所は城橋
 出替りれ出待はつてり友芝居
 かかろ〜や首尾も〜と〜池乃鳥
 袖と〜と〜道理が〜と〜花の風

山夕 露石 八木 浪十 子蜂 琴色 十秋 古穿 音雪 百里



音雪



音雪 自

相鏡ハ女席ふろし勢法昨日
 三条のこゝへ挨拶初亦午
 初午小川口登あり二の銘
 天あゝ地や相鏡小自虫草
 初午や満ちて七日合小櫃
 氷割る鬘れ名所の地茨葵
 宗也そたし娘ハ投取投ク那

初午

七の午れ花やま角が夜子鳥
 初午や休るまゝ多も侍連小由

財 穀
 如 珪
 如 蝶
 梯 條
 至 凡
 秀 圃
 楓 谷

暮 琴
 秀 玉

平塚
大塚
小田原
箱根
三浦
沼津
原
神原
健井
真津

夕影子振くもをりる桐畑
春野や鞠まあしをうる石
小田原ハ花印命の並ぶ所
高解の肌搦れ許あふ
くひまよきをそふ黄樋伝
障らぬ女其了んかそく
浮世の繁華や不二のふり
白濁や女乃身よりけり
この世や強よきたけり
菘花は流るるそ花のぬい麻
神は乃白きりぬる寺乃林

竹止
巴水
桃下
一房
銀河
一巴
子章
冬菖
涙来
如陽

白流
舟中
丸子
愚奴
菱枝
清田
かたや
目板
色川
健井
元井

猿杵尾をくまゆく白狐膏
山柳と菊子のそけ人の日記分
一西子むの流よ南とこ川
忠信のふ一入乃ことう
昨ハ清一歩りのきらけ解結
蝶をく後よあまの鞠う
赤湯くわしき高解の流る者
杖をくくさくひらふ小町橋
高橋や又月らうた馬のち
志んそく知に袋舟の車
望望子勝の鶴さし書り如

杉江
車桑
望全
依十
文十
花麦
文江
花子
待必
梨角
丸十

浪虫 舞坂 荒井 志(三) 二川 吉田 御使 赤坂 菱川 墨場 池程新

支那やふ松の馬れおよ右
甚の室や初ア礫乃めゆと里
とつあや四月朝の通きとの
御よ吹しん念やうの芽子御ん坂
ふらやゆさ更ハあのは也きあ
繪よまけりるあゆのう因也橋の紐
待てまけりあけりる屏風詠云
火焚女や歌あけりる雛子あ
移る香の香何まてハ知れま
ふまけりん一き前まハ毒の障
いとを初れちるまハ市日法華老

文山 湖灯 橋立 緋夕 漫午 可全 湖夕 布川 芳菊 貫十 柿戸

鳴海 宮 桑名 四日市 乙未御 唐土 龜山 冥 板の 下 六山


舟雲うるハ八重まそ花をま
あふやふ入射解一何まま
作音舟や学も船まこま
寝て起くまかかんんんま
風ハ帆子と歌とあんまのあはれ
こまのそとまかや一井家海
唐土れや桑房うまよと唐依
龜やまやゆう方集乃初の舞
嘆うる一休喇一鼓の死
そまやあくまを崔あまは板の下
鈴麻なる指とゆく甚柳

支流 坊地 出紫 松原 君山 咲洲 海市 毒十 心夕 荷十 机手

石谷 春く酒みふくら味や雲の糸
 草津 雪清くてお女志や一る部山
 大津 東風おれそそ母のあはれ夜更け
 京 寸信やのそと玉溜うつとく尺
 人ちぬ花の都や鱗の角
 風谷 李侗
 湖十

露月ののり 他度曲の面白
 き草子集と其つら
 をんよ金さ〜〜〜
 月母よ人〜の句と哉
 束の〜〜〜
 ころ〜〜〜

眞子尾あつりし柳よとを
 しのぎよ抱きせ藤花乃
 おのふ日に題しとく小冊
 ありぬるし日のかゝる次
 幾くの戸もと待のこ

宗阿歌
 山夕


京雛

表八句

京雛や翠簾れはは浅る程の猫
 ぬいしくや露油の文箱
 是雨り撫り枝を搔立る
 旅ありあ終や井花水で目
 町人らも武士らも志建は嘯好
 元氣此外ふふりかほぼこ
 いふ有は隣の遠れ又自取
 虫娘しすお茶女達

北遊
 暮琴

露月 湖十 潭北 楓谷 雄玉 百里 標梅

藤

ひらぬの暮のこころを池の波
の心きうれふこれ切者也手入後
銭探のあの手小機や後見

ふ己

梅も山へ當日あはれ小細帯白
君う為己の目核やとぐり葉

永白

永見目や六初のをまき銀を密
永見目や花行の配りまじりく

文よりぬ永見目を又香も花も
永見目や女帝刀足きて十五町

藤

踊子れくくう花行や後見花
神紙かたし〜後小群々う落出立
後やういは是る思戸の面白
友浪乃彩かどく思足乃若
有白や後吹揚れたるうま

汐子

思を貝牧子ハ規去曙抄

治旭

秀玉

富雪

二川

蒼玉

山玉

柴荷

志水

藤枝

京巴

紫荷

吟糸

昔花

和賤

湖十

雜け不難波の青雲坂下哉
 為小常や汝下此是小端入
 龜甲剛駕之力余行汝下哉
 撞板百砂入撞也は汝下哉
 頃の松乃核石小迴る坂下哉
 女之形る鈴符乃留道之
 精進の兼疏酒之邪大汝下
 蜻之多く名系之所之旨下
 桃咲やうハのをぬく下大根

桃

青雲 楓谷 如珪 貫十 岷畢 海市 東梅 花麥 百里

かきの籬凡小考免きう丸合羽
 姑れねおちや川や籬掃除
 男子此鷲乃打落し也籬不手
 籬首をき也葉子小あ和ても湯煮出
 奥方此一晚をきく汝下下哉
 病く待は籬の世系此年不増
 千里行馬之は嘶く下漸下哉
 名配りて松城肥と也最の花
 猿猴を身とも行また花此花
 劍と吞龍此よもき也雲乃藤

潭北 晚齋 勇松 素牛 巴丸 加林 子之 葦蒼 里般 杜川

牙のまや 是をさるるも 観蛇
 親多は 駕とどう 免は白雲
 於於於 於於於 魂決 一 東向あり
 市燈消ぬ 小菰を 針小 不 情 妻
 精望の 山 まで 市 凡の 雨 山 ぬ
 官守は 膳り 何り 世 志 くれ 月
 時と くれ 祢 ち する 意 の あり 高 法
 道 哲 け 鐘 と ち とも や 東 の 雨
 片 頭 男 け 藝 不 法 あり と 馬
 梅 香 や 傘 け ち び け 祢 陽 香

風 丈 涉 鷄 蒼 松 派 十 古 帘 市 嵐 女 道 琴 壺 秀 圃 潭 北



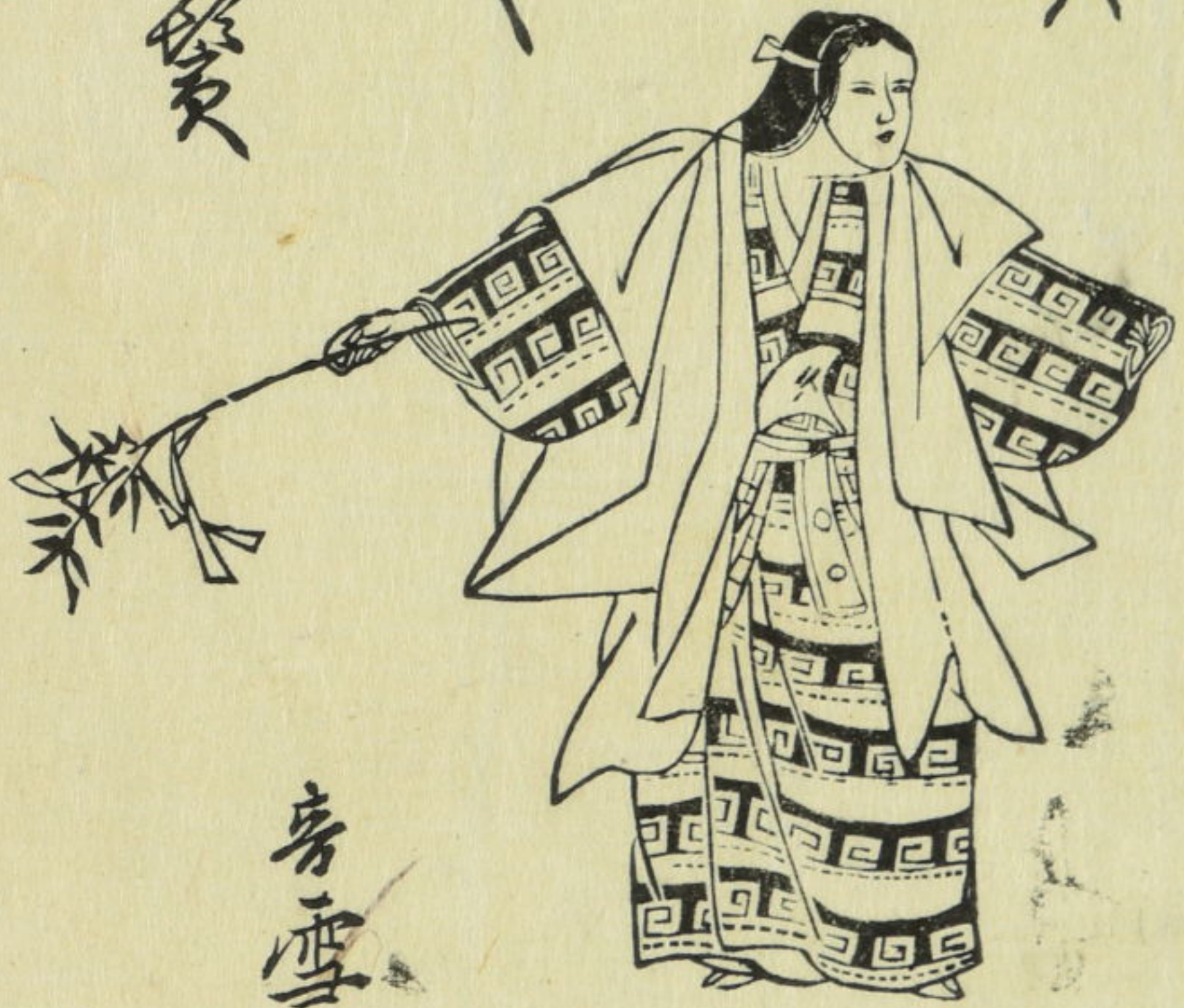
万水堂
亀角

我がぬハ

塚乃

柳や

みる元繁



房雲
貞

人目名や頼小海棠角田川
柳塚を移すくくはけは法苑宗
柳陰を乃予之物や知らハる
寄小あ心夢念佛柳ととる子森
隅田川の根水草向へ京男
海より子や柳と樹と自れ然
心は柳を移すとこ川
水際や几ふハ柳小泣と戸
柳あはたふとくふと酒枝嫌
題自れ柳ハナととるふあや柳

如珪
木昌
岷翠
文岩
至兄
紫紋
以翠
延齒
財賊
兩賊

道成妖聲のしと度と寺の蟬
 細眉の作りし衆や鬼刺
 其まのまのや瘡まのまの寺
 指成の心別まのまの顔
 汎云の心まの湯まのまの螺哉
 白雲のまのまの動くまのまの
 其の明のまのまの鏡にまのまの
 駒也や翔日山乃まのまの
 乳縫のまのまの不見まのまの
 ぬのくまのまのまの是まのまの

百 八 標 露 文 東 芦 子 仙 折
 里 木 梅 石 十 竜 人 蟻 和 巾



和之や棒と高きるに紫蜻
 逆たりや六十六の国を以
 笈やとも唐系を袋免難
 鷹の行邊や加帳
 奉加帳蛇と舌の反音原を
 喜入身のそる名や三夜心分
 万葉れ関所手形や一奏
 生酔の寐よ深生れ部公
 憎の折檻禿着さむ
 虚云れ話と手際小後と雲雀

雄王 潜之 楓谷 扇車 野全 千秋 二周 艶女 音雪 露月



音雪

雜春

背發や拳我 先身阿と色
西海うたき宿臥あつて坪董
人並我々善薩ちくほく梅狩
色めくや出替り茶の僕の塵
きやれ目ととこれとつう道多
日の永小ぬ舟ちまきてえう
深若れむよひぬあゝ雲の香
磁石より大手小捌く雲雀哉
横雲とふらう返すやふらう

蒼玉 秀玉 吟糸 梅枝 秀夕 文峰 彦 鶏 佐野 蕉 雨 里 船 蔵 蒼

永死日や鏡の道短夕紀粧
永赤目や梢をたをたて深深証

東廠乃こは具

咲勝りて花のよき野と多の雲
はるく友の跡戻逆れ
菱柳や長いと手拍自新開
白ゆこれ齋堂あつと行和
おほのりお蜻乃入道蘇花
りつを又延てや若れ結成町
里深し菱柳あつと潜之廠

世野 杜川 日 里 船 延 齒 潜 之 大 梅 派 十 宇 曲 志 靜 周 子

病地入乃塩瀬和中之夢
世夢るふと付了松見草
老翁弱乃後浪よまらふいふにわ

秀圃 露月 八木

雛桃

鮑衣桶乃穀く守鉢擔子雛
紫草此夜居之雛乃新而夢
桃の白也臺中此外乃後庭
梳支を何所ふあふに柳の花
礼法し心の乳殿乃大踏
片町の裏を詠くや露のむ

涼巴 志水 和賤 泊¹ 里仙 延齒

一堂貫十のあはれ三年忌と居ふ余蓬小
侍とく一白以手向ふ各志を合きて
一章とくく賜雅居此佛眼小明カ
一花と桃く堂華不夜
去やむく強美唱して千餘言

湖十

法謝乃舞人はとくく蝶
青柳乃^續解く斗風見
歩行の時こそ旅衣あれ
去の味嫦娥乃甜る極の端
伝もまん鈴乃言の虫
しつ枯や夜花はあはれ大漆

貫十 花千 出紫 花姿 辰助 文江

ちうまお部之晩汐以
 寝いそ撫くも疼る娘の手
 鼻自らの眩る色を咬く
 片云を咽へる居く多
 一家を疎とす 清人
 市神乃杖を下す九五加下五
 運の強しを難小抱る
 汗骨母彈るれハ瓶ふし
 活衣乃嚴翹るる
 材薪の天柱の傍く花盤

梅十
 梅戸
 海市
 冬菖
 聖花
 雁字
 菊燈
 銀葉
 剪雪
 堵遊

晴乃の隣くみぬる手水神
 似たりや似たり老の依程流
 懐へ棒を市にまは菜箱
 蝙蝠息多 契善坊谷
 引廻し金渡り多 妾の目
 人の向ふを毒痛く人
 挑燈を賣く方おねり
 大饅頭状形石小 踏
 耳塞く斗もふ氷面交り

堵十
 七鳥
 十里
 竹風
 露香
 玉宇
 柝色
 荷十
 金莖
 十菴

遊しし登る園の名さう
 佛法も白衣寺の形二言
 鶴へ寄也と町料理人
 楊柳と寄きうと云へ去後
 堀乃端口城行遠く袖
 やうと申して遊るをさう
 歎けま兼白結句拾人
 歩知歩初れをし如古れ
 深身むくく平郡山寺
 越鳥 三聲 氣向 吳唇 曙漸 風谷 風手 李峴 露柱

上巳

鬼津とぬやあまかしの雅妙
 鄙人そ羅子や遠く意驚の首
 仙人了らまゝ出遊は町の桃
 なまゝや巾裏のまはれ世帯志
 和らうは母れ恵らや遠餅
 茶を多めではさう肉とろ羅志
 高津龍の二重とのもや
 向とく里とろ海かけよ
 桃乃水泊そく如く三見魚の系地
 子孫者れ遠く来あし羅志
 宇曲 扇車 魚貢 出紫 如見 如蝶
 東竜 東梅

初孫を下和り也きふれ桃

重三

離宮や昌門くく之輪乃非
旅翁殿と男ハ出立乃市羅
万葉れふと紫雲あり中羅
品川をさく所の流や汝子君
紫裏附あり坂とさく離る邪

秀圃
露月

治洲
青峨
佳風
茶室
山夕

享保丙午活筆

水子ぬきま
いよぬきま
いよぬきま
いよぬきま
いよぬきま
いよぬきま

志心... 存... 武陽... 高田... 高... 乃

抄理... 每... 汝

人さなむかすも
あはれ

あはれ

あはれ



鉢形

表八句

改しそ白装包り岨若紫
庭もろがおもく夏海乃遠
もろ如夢如夢のむら色舒く
入相きげハ挽の手白
は夢才百ふ余於所物好
珍神云ふのほれ事下
赤鱗凡袖より合を市の月
是れ河原より居る錫挽

玉尋

素丸 長水 露月 如珪 露白 山玉 百里

郭云

山智筈や石めも名野活く寺と
漆物の滝や等かろくおらるる花

扇風
玉尋

牡丹

花堂之は自傍先立牡丹哉
柳子あましく牡丹や柳も白柳
箱根路を山と子旅者牡丹畑

蒼玉
秀玉
沾玉

雜夏

閑處を我知難れあふ死の那
麦秋れ西小志く寺妹背山

扇風
山玉

山く此若紫の比や汗不車
灌佛乃内日と古く苑の桶
おきりるもあし留不足野樹
苑く此移り菊若紫素親子

沾旭
蒼玉
秀玉
富雪

郭云

水影見光行難小ほろく死少
芝系り新落くはる時鳥

山夕
百里

全

和子起はのきて八尋新鶴語石
ほろく寺と一羽とあま玄園帳

素丸
長水

物喰乃旅々地ありおとすき
 かと地は理非ハ附録少娘王
 侍らち八耳小角あり郭公
 去砂く風只十二文字中き
 獲ふは千鳥く向ては侍多
 下八国かきそ吾書れ中と手
 心さう痛やとも小啼子れ杜
 响書れむとく痛是やかそ
 人先小老の森是やおとす
 ほとく手ささ外天下並辰妙法

京巴 昔花 志水 和賤 湖仙 沾薄 如珪 都竹 梅枝 鶴里

鯉魚集

初やいと鎌倉殿小酒つたり
 如くくくは花是れ向れ是集哉
 空へ手乃扇くともく初鯉
 物ノ童小涙く友先や初松魚
 若浪れまがあまきくとも鯉
 隣塔やおひく嬉れ是集吹
 心行若集れ下や手細組
 若集れは由然小蜻く中潜
 竹の子や又是月呂の隣

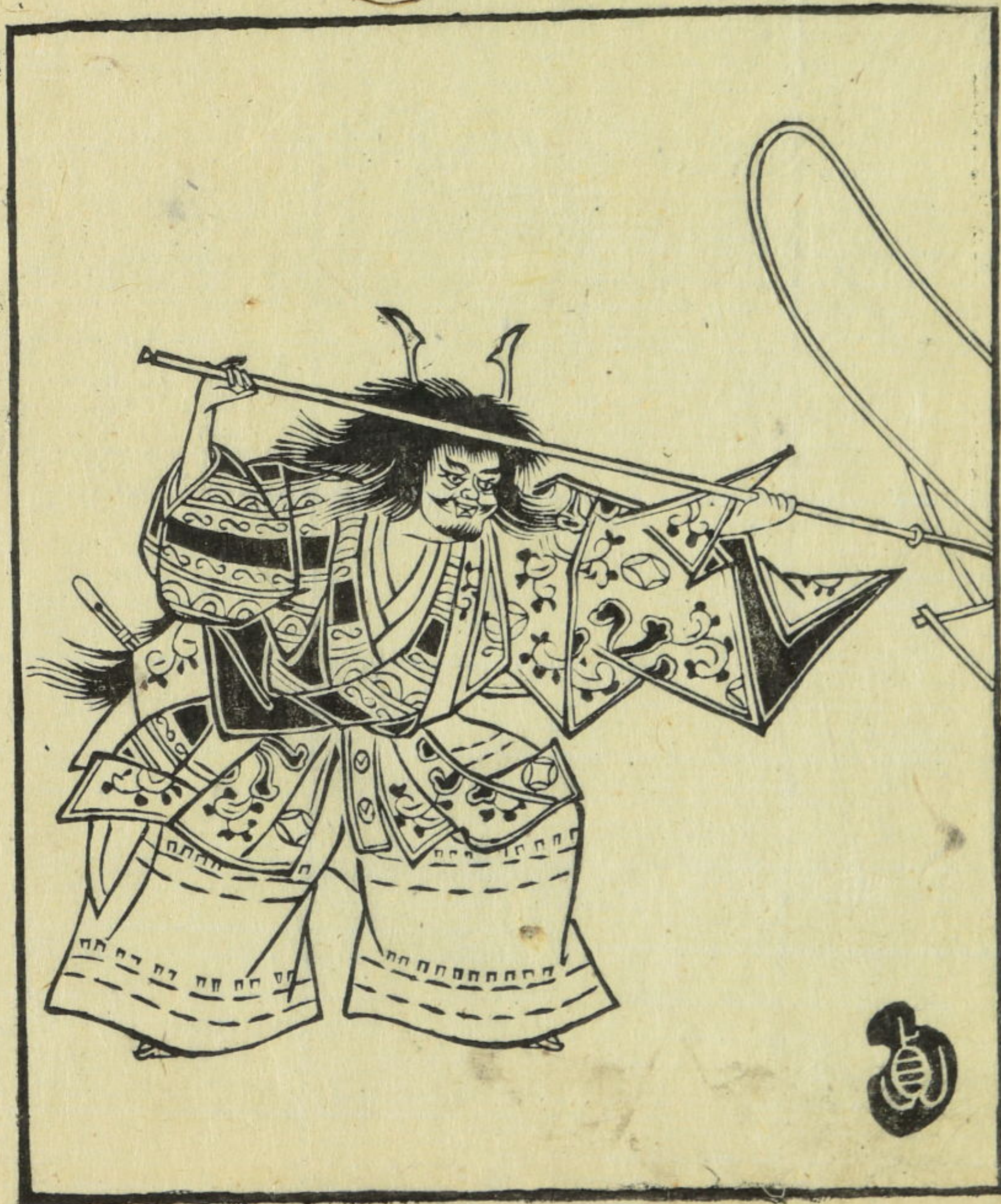
柴荷 立几 青雲 帶雨 尹雪 楓谷 潜之 標梅 一漁

文物亦多は唐北かゝると瓜
 鴻毛や粟粒をよと小夜は夢
 角尾草く酒をさぐぬ飯糰
 木質あり西瓜まゝに情け
 永い日小指をくぐりて小鉄
 南無三寶亦く兒遊て郭公
 為曇れ是を扇子乃養ひや
 酒の如くきしほれ膚を啼き
 流状れ目や候外乃君り床
 又十年花彈く手はあや如霞

八木 潜之 文岩 以翠 東竜 芦人 琴色 草笛 艶女 雄玉



寿寧

貞

雨風小舞をきくともや西風
 音柳小折く此字色毎は危
 離の病此波小う如身一尾う海
 付頭を身退りり一名九尊
 夏川小本を刀遣ひや百五垢難
 夕涼を疎きう浪のせし喧喚
 垢難か此れ殊教を向ふ花火哉
 舩小蚊れらむと殊教でアきり
 常々行し毎小待乳乃絶同う那
 めく此れ勢小亦慶にせう死

岷 楓 音 扇 紫 市 至 之 秀 如
 岷 楓 音 扇 紫 市 至 之 秀 如
 岷 楓 音 扇 紫 市 至 之 秀 如

麦秋

色遠く麦北海系奥子ハ
八宗此一瓢 粟や菜免州
三若くあ流豊や麦の秋

以月朔日旅行乃乃出

綿入ふくくく七キの別を哉
蝶やほまて遊して其を大舞
卯の花や女とたむむ袋跡
卯の花乃るまゝあゝ奴々白子形
卯此花ふ袖活きは妙義道

和賤

宇曲

志靜

鶴里

秀夕

邑里

琴侶

延齒

株配ぞ一翠もまゝりや麦の秋

繁坂れ粟をむりや麦の人

福系や麦の秋う勢を海波

あ粟うう石城寺を切や小倉山

流死出これ粟もゆまうや花を葉

作とく死とくまうの流し心流投

馬を花刺れくく序子小舞まう海と

思くくいさか女人の心と幸ふ

杜川

日里般

上野東徑

女

杜川

潭北

通昭

馬屋海乃乃海じや
うはくくあう紫 陰

里般



鶴の

塘小

西

花

うの木

葉月舎

琴子

名中子圖



業手

康秀

森樸

小町

思五

松更もとや利
 印しつりや
 番組成法い原と
 日てもし面をさ出く
 残畧成すうと
 有ふきせし
 温泉遊ひのきろこ
 町乃子こ記まぞか
 水梨赤修く
 流奴

杜川

川 全 般 今

若葉

月夜や若葉此坐の月八方
酒買れ此身や若葉此坐
娘市を雨夜の若葉此坐
男形一多見系此若葉哉
海及り家此雉子殿敵く若葉哉
花や実乃用不若此若葉哉

雞

水衣若く代しある雞鶏の
夢屋少於坂東声乃雞の如

原巴 大梅 如陽 波十 露月 里仙

並鷄 扇車

神奈川や若葉此雞了系三里
佐野酒乃朱城とくく不雞う那
色小若く我妻清乃とく川雞

郭公

蜜まれ空小むき一那中ち若葉
蜀五乃雷よ食時ほや若葉
氣小若く大人門中とくきと
乾坤乃九事小留まれ郭公
山うつり引くる尾さし一若葉
現うはた右とくく反郭公

野全 市嵐 宇曲

標梅 木昌 如見 志靜 琴侶 宇既

下戸性此居きり立きり杜宇

何缸

全

杜鵑鼻と記及多し世に唱

八木

荒草此日しむ曲しや時鳥

貫十

白茅志を何もの星を郭云

花麥

泊せ固くし金持質が世に

音壁

蚊帳をも法にのし斗を時鳥

十真 沾意

如長れ其短ふ似きり時鳥

秀圃

撫しきく油か事たよ云如序

露月

郭云云云く固也辰止亭

湖十

享保丙午卯月

るありしうしつふきり

さふてさきせし知ん

るま何れと海ありをさるる意

さし回しきあ難者ありしを旅

下しきしあしきしき流流の二羽

下しきしあしきしき流流の二羽

下しきしあしきしき流流の二羽

下しきしあしきしき流流の二羽

下しきしあしきしき流流の二羽

けまふ絶えりて
 風流の友や
 の印をとして
 一葉のあふ井
 流るるに
 母月山

小と流
 閑

絵きり

表八句

水も照れ風も霞美乃心
 外塔の橋へ夏の花砲
 露乃とる松之富貴此術
 露乃とる松之富貴此術
 中筋ハ極小塔の露乃とる
 葉乃とるは物事此故
 何れ一被月の川乃沖
 京ては格あは人並

山玉
 山夕
 秀玉
 秀夕
 露月
 八木
 百里
 花菱

汗

口紅粉で洗はまがたり行越
海老子の袖乃ちまねや行ぬ
傾城とりよそのとろく行る

瞿麦

ゆびね此川系あしと涼時
その母の掃とまきと水長
あそび花を立る唐相撲
誰やと運屋油を様子る育
唐くれば見惟もや職人元

舞殿
秀玉
富雲

北
沾旭
暮琴
魚列
涼巴
舟藥



秀玉

とくはてし

ゆき落てし短尺書ふ入の漁
類形乃外百書ふとて天
吹矢器ききぞし為れんを
夢み似く飯と巡るやとて
曲家の掉や身出はとて
木曾川の筏ややぐとて
水晶乃拍子木見たりとて
川の多ふ光をきよふとて
疾速に帰そ残れやとて

素丸 舟糸 茨鷄 大梅 扇車 紅夕 如見 市嵐 露月

ふと手おとるやうに

行

船雲乃きりや直舟行齋
終り陰家の行や夕葉舟
行少兒不紋をみる下肥はあ
かたはらたてぬ時夏や行
行きし旅笠をよむ七歩乃詩
朝と冬と春節三葉下流の行
正夜や一富士二若子こみ行
湯あがりや行をきくく書院

一漁 原巴 和賤 立几 出口 東水 潭石 秀圃 柴荷

宿下り此風中の行来也枝のまじ
 短装乃枝小隈と於素装ふか
 衣くや糸は帯う被てかゝる風
 何葉の針乃行来や喜の居門
 的の草を女姿に於せりか
 今の馬の般や如於尋枝
 新酒今亦むや名跡大和口
 蛇穴と飛丸の糸や手小三曲
 虫や寺うり里へかゝる風を
 夏は海を夢み遠く自毛はきり

露石 昔花 花千 音雲 岷翠 千秋 至凡 秀圃 扇車 八木



白手^シ花^{シク}草^クやみのさる果^ク八^ク痔^ク乃^ク茶^ク
 省^ク叢^クれ^ク揚^クも^クむ^クい^クき^クう^クは^ク交^ク生^ク
 今^クと^クその^ク治^ク承^クの^ク雲^ク香^ク漢^ク寺^クも^クく
 水^ク辨^クお^クま^クの^ク緋^ク威^ク乃^ク甚^クと^クり^ク邦^ク
 夏^ク鶯^クや^ク何^クと^ク言^クへ^クし^クる^ク記^ク
 我^ク去^クれ^ク世^ク根^ク朽^クて^クも^ク保^クる^ク子^ク
 煙^ク亦^クや^ク迷^ク懐^ク涼^クと^ク振^クり^ク介^ク
 伏^ク芝^クや^ク教^ク弁^ク尚^ク志^ク扇^ク子^ク形^ク
 清^ク謀^ク殺^クと^ク掃^クく^ク進^クむ^クる^クま^クと^クり^ク
 順^ク礼^クハ^ク扇^クと^ク志^クる^ク尻^ク乃^ク泣^ク

百 里 仙
 紅 夕
 沾 意
 収 々
 紫 紋
 東 梅
 市 崑
 財 我
 標 梅



権木場空のゆへに
 今涼月と南や
 多毛千賀舞ハ
 大文字浪身羽を
 初夜や星乃う
 打まや河水とも
 賣強里籠る鴉
 掛糸と貴人の目
 伏乃はゆか

楓谷 貫十 両峩 如珪 浪十 曼美 東竜 海市 露月 花麥



白鳳朝の福王

おきしこ

梅もや素續の外乃 強声
目もくれぬ梅し 子れお母の教
梅もれ花の發際やうへりうへ
あししこ庭訓格の素植ふ
梅もやあししこさうは梅魁
梅もや見し傾城乃 裏所

和殿 秀久 八木 浦 潭石 助角 艶女

虫ほし

むしこやう海の猿ハ繫ども
虫ほし此流親おらぐら流し

百里 文背

虫干や油や禱りの水ハ海
八雲さのし下地必るう用行
何金権やそ真殿の去用子
むしこや海さま軍形世話さ

如立 浪十 之悦 折水

雜夏

今もと曇梅ららし細きらん物
虫新牛小法師や若元寺
西園と鈴の存るる果小哉
砂ころれ水が新乃果小哉
夕立や葉螺ともるる年の尻
螢うね雪うね流うく大井川

志水 梅枝 木昌 以舉 樽立 全

雲行は手巾小出勢海打取
櫻切ルものるをありし夏月
濡るきくぬれ外なる蝶乃声
落るある瓦今節蝶の色
下まや花の盛はがいのが
葉志花ぬ袖と行踏は梅は哉
夏
左様青乃の盛根うら遠近涼の
韓退之くし市人多く一薄の露
雲金小鳴るぬ蛙乃暑小ぬ

享保丙午五月廿九日

徳雅
桃雨
出紫
貫十
魚列
全
山夕
湖十
青嶽

蕉ぬくるとは来能白のく月くゝ感の
去てぬを慕ひ世よ名をたれかふと
みふ古人とくふくく鳴呼惜か今も月
清涼いほとくわれ白を様は梅とく
ぬふ家くゆ休をくくはとくはぬくぬ
のこみはくはぬる人かぬかぬかぬ
もくく楽くぬかぬかぬかぬかぬかぬ

ありて狂歌あはれよふもつらふもつらふ
 所謂を味を味ふもつらふもつらふし
 古人再起すもつらふもつらふし
 ありて前白くもつらふもつらふ
 自守すもつらふもつらふ
 ありてもつらふもつらふ
 ありてもつらふもつらふ

川道遙

表八句

妙乃一字を此か務舟に上川
 夕日強く紅たしけり
 拙小本に掛る表は深くて
 鴨艦乃群居る千世の妙
 飄草は初はけりもつらふもつらふ
 枕に付て斤方乃もつらふ
 雨乃月唯鳴りもつらふ瀬高
 燕乃海に流るもつらふ味増

右旭
 潭北
 素丸
 紫荷
 両娥
 財峨
 白雲
 露月

端午

今朝之入菖蒲之根
菖蒲刈之入乃
之先や紫く綴りて
被之菖蒲の香けり

五月雨

五月雨乃昼寐淋
濡くはく雲は
五月雨とく
五月雨や新烈中乃町

露沾
扇風
山玉
秀玉

扇風
沾旭
蒼玉
秀玉

五月雨地也
五月雨和歌乃浦人
五月雨先家去度乃
五月雨下結色横
五月雨眼鏡也
五月雨乃有
五月雨田嘉や
五月雨今と
五月雨茶碗

暮琴
柴荷
文紫
和殿
左几
梅枝
潜之
如慶
扇車
如珪

端午

一橋わさびの神や菜摘
寐あらず鳥を争ふ子戯れ
粽介と念は入るみ流る物

全

神農の神膳一は柏餅
一言一破毛をかぶるあや先
はかばか維ふおろしあやあ
憾見や繁花の月和香踏賣
菖蒲あや女うかすもあや

山夕
一漢
百里

素丸
涼巴
文幣
和賤
秀夕

枕の籬乃香有り朝のや先
あやあさせり水も神代のはら^桶籠
神喜み今日に男を花あやめ
柏賣の白髪も結ぬあやめ
控られは髪もあやめ割下水
雛うたはあやのあやめ主
泥鰌の能月にはげりあやめ
歎乃雲うたゆく戯れ
手道や列を海よりんあやめ
首草わたり別れ侍者保小

莎鷄
延齒
大梅
出紫
歸鶴
杜川
洞山
秀圃
伴虹
八木



青雲

龍神さそをなれん初糺
 考の竹乃すかほの懐子
 生盛乃ま居涼一も穂邊湖
 うららや湖上にあんせりる市
 面白乃麻は麻乃要の如
 宗倉利生れいゆるし射籠
 掃洒く給神死て替小
 もとさうや富貴の札と云々
 持の金銀をさうく初糺
 結約や三太居れあらん坊

藤枝 如陽 派十 野全 以翠 紫紋 至兄 草笛 林治 音塵

何の扇もこれに似たり 妻高
 芙蓉のそよ水も花の露に似たり 八木
 山賊の地も寸草なく 雪女
 千瓢の志のくさくさ 夕日照
 立花のくさくさ 天事此抱え帯
 糸の瓢致仕の大臣は遠きり 若松
 浪波寒が寐云も涼水に似たり 千秋
 夕魚乃隣にさけん愛女も 艶女
 夕魚乃隣にさけん愛女も 露月
 流し月も襟の水際哀れ 百里

志水 八木 潜之 楓谷 財我 若松 千秋 艶女 露月 百里

半 部



財我印

西三毛流り汗や草履紅
 梅冬に何橋乃踏きぬと首合
 草履紅待や霜夜の今戸橋
 かゝ扇やけるみ川へ此乃皮
 追川に唐冠乃頭巾にぬ
 物衣や獅子たさるる水呑味
 たるれや小待のたう乳當子否
 菱川の一巻得るも橋邊の
 やくも此女夜客の波の月
 梅乃霜のるる梅乃霜のる

吟糸
 如珪
 西峨
 文十
 扇車
 東龍
 東梅
 秀團
 折巾
 露石



身雲
 自

夜討曾家

長生

十目乃

又返人

に流や

舌下汗



和香堂暮琴

鶴川

衣冠をぬく者者鶴河久礼

意卓此かゝる装束や鶴河舟

扱是や盗人上戸鶴繩陰

南京の系に控え鶴乃森

竹葉に腰括その鶴川うめ

ハッおの入割ほどく鶴舟汁

雑夏

志氣持今釣突りきん長衣
切臆乃弾正あつらふかき

富雪

涼巴

昔花

里般

如慶

派十

露沾

全

新後明題歌集

梅風輯全四冊新明題集
近代の歌友の歌と歌
拾ひ集む

俳諧本

江戸紫
淡のま砂
續真砂
百千鳥

并前句冠附小倉隆
小倉源氏哥仙流四名付
品と珠友新き句とて集
今交新板出中いれ集
さゞと石 蝶流ぐい

六諭衍義小意

中村平五作 全三冊
大意の意以平かち記
板行出来

老子本義

藤芦隱作 全二冊
板行出来

分量夜話

常盤潭地作 全四冊
民家分量記後篇
追付板行出来

右出才と分中知せのこめ記也

假名文章

玉壺後筆 全二冊
尚世かちひをのわい
板しる

武家軍鑑

全四冊
ひくかき繪入

武家軍談

全三冊
ひくかき繪入

武家功者物語

全三冊
平儀名繪入

庭訓往来

玉壺後筆全貳冊
大字口行お束

江戸通本町三町目

西村源六藏版

